

結核治療ニ對スル新藥及ビ滋養品

一九二六年ニ對スル報告

Über neue Medikamente und Nährmittel für die Behandlung der Tuberkulose (Bericht über das Jahr 1926) von Dr. med. Georg Schröder, Zeitschr. f. Tuberk., Band 48, Heft 4, 1927.

ゲオルグ、シユレーデル

一 特異性竝ニ非特異性刺戟療法

當報告年度ニハ結核豫防接種問題ガ特ニ盛ニ論議セラレ、獨リ結核ノ感染ヲ防止スルニ止マラズ、之ヲ輕快セシメ或ハ治癒セシムベキ有效接種劑ヲ發見セントノ企圖ハ各方面ニ起リタリ。從來世人ハ——少クトモ獨逸ニ於テハ——人工的豫防ハ唯生菌ヲ以テノミ望ミ得ベキモノナリトノ考ヲ有シタリシガ、近時ノ試験ハ多少ニカ、ワラズ無毒化セル結核菌ヲ以テ同一目的ヲ達セント努力セラレタリ。

余等ハ既ニ先報告(Z. f. T. Bd. 45, H. 2)ニ於テ此種豫防接種劑ノ多數ヲ紹介シ Calmette ノ BCGニ就キテ殊ニ詳細記述セリ、佛白兩國ニ於ケル實驗ハ相反スル成績ヲ示シタルガ、佛國ニテハ此方法ニ大ナル希望ヲ繋ギ、數千ノ小兒及ビ乳兒ニ BCGヲ内服セシメシニ大體ニ於テ障碍ハ認メラレズ、大多數ノ小兒ハ外的傳染ニ曝露セルニ拘ハラズ結核ニ罹病セズニ保タレタリ。而シテ本法ニ對スル批評ハ主トシテ其生菌使用ノ點ニ異議ヲ存ス、即チ動物試験上全然無毒ナル菌ト雖モ人體中ニ於テ長期間ニ如何ナル關係トナルヤハ何人モ知ラザル所ナリ、殊ニ和蘭ニテハ被接種者ニ障碍ヲ見タル

報告アリ (Schurmann und Stekhoven)

Langer ノ接種劑ハ獨逸ニ於テ多數ノ小兒ニ試ミラレタリ、之ハヨク堪ヘラレ數ケ月中ニ著明ノ「アルレルギー」ヲ獲得セリ。Langer ハ此「アルレルギー」ヲ以テ結核ニ對スル抵抗力ノ増進ヲ示スモノトセリ、且此接種ニヨリテ何等ノ障礙殊ニ活動性結核病竈ノ發現等ヲ認メズ、氏ハ動物試驗ニテハ「モルモット」ノ結核感染試驗ニテ抵抗力ノ増強ヲ確カメ、又小兒ニ於ケル經驗ハ Zadek 及ビ Meyer ニヨリテ確認セラレタリ。即氏等ハ此接種劑ニ豫防力(微弱ナガラモ)アルコトハ確定的事實ト信ジ、又「アルレルギー」ハ平均ニ乃至四ケ月後ニ起ルコトヲ認メタリ、最近ベルリン醫學會ニ於テモ此 Langer 氏法ガ徹底的ニ論戰セラレタリ、Neufeld ト B. Lange ハ滅殺菌ヲ以テシテハ決シテ確實ノ豫防力ヲ期待シ得ズ、往年ノ研究家ガ死菌ニテ達シ得タリシヨリ以上ノ成績ヲ舉グル能ハズト主張セリ、又曰ク、Langer 法モ Calmette 法モ恐ラク輕微ノ抵抗力増進ハ惹起スベケンモ、之ガ實地應用ノ可否ハ不明ナリト、思フニ最後ノ斷案ヲ下シ得ル迄ニハ猶數年ヲ要スルコト確實ナリ。

日本ノ有馬、青山、太繩三氏ノ豫防接種劑(AO)ニ就キテハ嘗テ既ニ報告セルガ氏等ハ「サボニン」含有培養基ニ發育セシメ無毒化セル結核菌ヲ使用シ、之ヲ治療上ニ應用セル成績モ良好ナリト云フ。

Bisceglie 及 Schöffer ハ結核菌ヲ「ブロムラヂウム」ニテ處理シ以テ其生活力、形態、毒力等ニ變化ヲ與ヘ、斯カル菌株ニテ「モルモット」ニ豫防接種セルニ後ノ感染ニ對シ著シキ抵抗力ヲ示シタリ、又「ツベルクリン」ニ對シ著明ノ「アルレルギー」ヲ呈シタリ。然レドモ氏等ハ死菌又ハ其成分ヲ以テシテハ云フニ足ル程ノ免疫狀態ヲ獲ルコト能ハズトセリ。即チ Selzer ガ再三論ジタル見解ニ賛成セルナリ。

Möller ハ結核患者ニ對シ二週間ノ間隔ニテ約十萬個ノ生結核菌ノ皮内注射ヲナセリ、氏ハ之ヲ以テ所謂沈黙傳染(Stumme Infektion) ヲ爲シ著明ナル豫防乃至治療效果ヲ舉ゲントナリ、然レドモ尙ホ生活セル結核菌ヲ人類ニ用ユル事ニハ多クノ反對アリ、絶對ニ避ケザルベカラズ。

Spronck 及 Hamburger ハ氏等ノ發見セル變形結核菌ニ就テ報告セリ、ソハ最早抗酸性ナラズ短時日ニ盛ニ發育シ「モル

モット」ニテ「ツベルクリン、アルレルギー」ヲ起スコトナシニ生結核菌感染ニ對スル抵抗ヲ著シク増強セシメ得タリト云フ、此製劑ハ死菌ヨリ成リ「Transmutan」ト云ヒ、結核患者ニモ遞増注射ヲナシ、全身反應ハアレドモ病竈反應ナシト云フ。

余自身ハ淋巴組織「エキス」内ニテ非病原性トナシ其形態ヲモ變ジタル結核菌ヲ豫防及ビ治療ノ目的ニ使用セル舊試驗ヲ再ビ試ミ、之ヲ臟器「エキス」其物ト併用セリ、先年余ガ脾臟、胸腺等ノ「エキス」ヲ以テ行ヘル試驗ハ今回新タニ前所見ノ正當ナリシヲ立證セリ、即チ結核菌ハ是等ノ「エキス」中ニテ非病原性トナリ、脂肪皮ヲ脱シテ非抗酸性トナル、Bergelハ此溶菌現象ヲ脂肪分解酵素ノ作用ニテ説明ス、是等ノ所見ハ最近 Zlofi, Isabolinsky, Gritowitsch 等ニヨリテモ確認セラレタリ。而シテ余等ハ斯クシテ得シ接種劑ヲ以テ動物試験ヲナシ、後ノ感染試験ニ對スル現著ノ抵抗力増進ヲ惹起シ得タリ、又患者ノ皮内ニ之ヲ注射スルニヨリ之ニ堪ヘ、屢々著シキ輕快ヲ見タリト信ズ、次デ此接種劑ヲ淋巴組織「エキス」ト併用セルコト前述ノ如シ。

「ツベルクリン」療法ニ關シテハ、各種「ツベルクリン」ハ結核ニ對スル免疫ヲ起ス能ハズ唯特異刺戟療法トシテ働クナリト云フ余ノ立脚點ガ益々是認セラル、ニ至リ、又此刺戟劑ニテ陽性「アチルギー」ヲ得ント努力スルハ至當ナラズ、寧ロ患者ノ「アルレルギー」ヲ増強スル方ガ價値アリト余ガ再三述ベシ見解ハ益々共鳴ヲ得タリ、吾人ハ是等ノ製劑ヲ以テ免疫ヲ得ルトカ又ハ大量ニ對シテ不感性タラシメ得ルナド云フ膠見ヲ直チニ除去セザルベカラズ。

特異刺戟劑ノ效果ノ判定ニ對シテハ Toennissen ノ觀察ハ重要ナリ、氏ハ發熱ヲ以テ病竈反應ニノミナラズ溫中樞刺戟ノ直接作用ニ歸セリ、該中樞ハ注射後約六週ニシテ特異性變化ヲ受ケテ敏感性トナレリトス、皮下注射劑中 Junker 及 Engel ノ Tebeprotin ハ量ノ正確サニ於テ最モ推奨スヘシト、又氏等ハ Schilling ノ Ertuban ノ皮下注射後屢々不快ナル病竈反應ヲ見タリト云フ。

Neire 及 Boeke ハ結核菌ヲ先ヅ「アセトン」ニテ處理シ動物試験ニテ抵抗力増強ヲ達シ得タルモノ、「メチールアルコホル」「エキス」トナセルモノヲ肺以外ノ結核患者ニ八日間隔ノ皮下及ビ筋内注射ヲナシ好結果ヲ見タリ、即チ三乃至十二

ケ月ニ亙リ、局所及ビ全身反應殆ド無ク、一般症狀ノ輕快ノ病竈ノ癥痕化ヲ示シタリト云フ。

又特異刺戟劑ヲ以テ皮膚ノ結核防禦作用ヲ亢進セシメントノ試ハ既ニ久シキ以前ヨリニシテ舊「ツベルクリン」ノ表皮下注射即チ Sahli 氏法ハ Gutfmann 及 Kerssenboom ニヨリテ實地ニモ推唱セラレタリ。Ektebin 塗入法ハ Bartels, Kramer 等ニヨレバ有效ナリトノコトナリ、後者ハ Ektebin ト Yaren ヲ併用セリ、Arneht ハ Pondorf 法ノ變法ニテ好結果ヲ得タリトテ長サ六糎ノ接種切創二十ケ作り三乃至四滴ノ舊「ツベルクリン」ヲ塗入スルコトヲ提唱セリ。

特異刺戟劑ノ内服ハ不確實ニシテ其效力疑問ナリ。Gruber Scheidin ノ Tasch ヲ療養所患者ニ與ヘテ效アリト稱シタリ。Schmidt-Labaume 及 Fetteke 二氏ノ經驗モ亦同様好成绩ナリシト云フ、M-Tb.R. ノ内服ハ Deycke ガ推唱シ Mething ハ七十例ノ經驗ニテ之ヲ肯定シ、病竈反應ハ見ザリキ。

種々ノ特異性刺戟劑ノ應用ニ關スル余等ノ經驗ニ就キテハ先ニ Bramstedt ガ綜括的ニ報告シタルガ、余等ハ更ニ Tabe-prolin ヲ使用シ、最近ニハ又 Ertuban ノ最小量ノ皮内應用ニテ好結果ヲ見タリ、此製劑ハ反應強キ故使用量ニ慎重ナルベク、且ツ又患者ノ觀察ヲ精細ニナスヲ要ス。余等ハ斯ク治療セル患者ニテ屢々一般症狀及ビ病竈所見ノ輕快其他血像ノ改善ト「アレルギー」ノ増強ヲ認メタリ。

次ニ非特異性刺戟療法ノ進歩ハ尙ホ一層不確實ナリ。Wolf-Eisner 及 Jahr ハ其作用ヲ炎症ノ惹起ニアリトシ、夫ニヨリ防衛素ガ遊離セラレ而シテ其作用ガ表ハル、ナリト云フ。Freund ニヨレバ蛋白療法ノ作用ノ本體ハ蛋白及ビ類脂體ノ分解起リ、之ニヨリ體内ニ毒素生ジテ血行ニ入ルニアリ、之ハ中間代謝ノ變調ニシテ他ノ原因ニテモ起シ得レドモ結核病機ノ自然的經過ニテモ生ズルナリ、故ニ蛋白療法ノ際最モ注意スベキハ其用量ニシテ作用ノ累積ヲ避ケザルベカラズ。

今ヤ議論ノ中心ハ脂肪體ガ結核治療上有效ナル刺戟劑トシテノ意義ヲ有スルヤ否ヤニアリ、Helkin ト稱スルハ類脂脂肪體ノ新製劑ノ一ニテ Ovo-Leithin ト「グリセリン」ノ合劑ニ種々ノ「ナトリウム」「カルチウム」「カリウム」等ノ鹽類ヲ含ミ其一・五糎ヲ三乃至四日毎ニ結核患者筋肉内ニ注射シテ有效ナリトハ Freymuth ノ報告ナリ。Behring 工場ノ Japa-

tren ニ就テハ前年既ニ詳述セリ、余等ノ實驗ニテハ適應例ニハヤハリ好結果ヲ見タリキ、Maurer モ〇・一乃至一・〇皮下注射ニテ卓效アリトセリ。Mattausch ハ多數例ニ筋肉内又ハ經口的ニ用ヒ、等シク好成績ナリシト云フ、又 Rare ハ「リバトレン」ニ就キテ綜説ヲ出シ、益々實地應用ノ經驗ヲ重ヌベキモノト云ヒ、且ツ又其用量ノ加減ヲ要スルコト、赤血球沈降度測定、血像ノ參考等ヲナスベキヲ附言シ、尙ホ外科的結核ニハ「リバトレン」療法ヲ特ニ推獎セリ。

余等ガ既ニ報告セル淋巴組織「エキス」療法モ亦類脂體療法ノ一ト考フベキモノニテ脾臟「エキス」ヲ一乃至二日毎ニ五乃至一〇糶筋内注射ニテ好結果ナリシ舊經驗ハ Bayle ガ多數ノ患者ニテ復試シテ之ヲ肯定セリ。氏ハ肺結核ノ七五%ガ之ニテ治愈セリト云フ、而シ好成績ニ過ルノ感アリ。Lipomykol (Gamelan) ニ就キテモ既ニ報告シタルコトアルモ Mattausch ハ之ヲ以テ好結果ヲ見、Much ト見解ヲ同ジウシ脂肪體ノ意義ハ疑フノ餘地ナシトセリ、Karyon モ亦非特異性刺戟療法ノ一ニ數フベキモノナルガ Buana ハ動物試驗ニテ、又 Kathy ハ肺又ハ爾他結核ノ各型患者ニテ好結果ヲ收メタリト云フ。

## 二 藥劑療法

石鹼療法ハ既ニ古ヨリ結核及ビ癩癧ニ應用シテ效アリトセラレシモ今尙ホ結核治療上相當ノ地位ヲ占ム、「テルベストロール」石鹼ハヨク使用セラル、余等モ殊ニ深部氣道ノ慢性「カタル」ノ傾向アル例ニ好シク之ヲ用ヒテ效ヲ見ル、又 Tegemeier ハ慢性肺癆ニ合併シ勝チナル上氣道及ビ氣管枝ノ「カタル」ニモ「テルベストロール」塗擦ヲ稱揚ス、是等ノ石鹼療法ハ皮膚ノ防禦作用ヲ増進ス。

石灰及ビ硅酸製劑モ興味多キモノナリ、Bickel ハ Guisol (硅酸「グアヤコール」化合物) ヲ推獎ス、之ハ體內ニテ分解シテ各自ノ作用ヲ表ハス。硅酸ハ一部分腸ノ上部ニテ吸收セラレ、一部分ハ大腸ニテ排出セラル、而シ「グアヤコール」ノ如ク尿中ニ排泄セラレズ Bickel ニヨレバ Calcimint ノ投與ハ著明ナル「カルチウム」溜溜ヲ來スト、燐、硅酸化合物 Phosphosilin ハ牛乳ニ十二滴ヅ、加ヘテ一日三回服用、Kirchner ハ斯クシテ肺ノ萎縮機能ノ増進ヲ見タリト、「クロールカルチウム」ノ靜脈注射ハ一週三回一〇%五糶ニテ一般狀態及他覺的所見ノ改善ヲ見タリト Pinkhof ガ報告セリ。又 Rasch

ハ硅酸曹達ノ「カゼイン」化合物ナル Silicatin ノ内服ヲ推奨ス。石灰及ビ硅酸ニ就テノ余等ノ經驗ハ從來ノ態度ヲ變ズベキ機會ニ遭遇セズ。即チ結核病機ニ對スル特別ノ治效アルヲ證明スルヲ得ザリキ。

「カンフル」劑中 Hexeton ハ獨リ心臟衰弱時ノミナラズ咯血ニモ可ナリ。Guggenheimier ハ呼吸ニ良影響アリトテ之ヲ愛用シ一%溶液ヲ靜脈内ニ一劑用フ、v. Muralt 及 Weller 及余等ハ咯血時ニ「カンフル」油ノ大量(二〇%液三劑毎六時間一乃至二日間)ヲ用ヒテ良好ナル止血作用ヲ見タリ。

心臟障得殊ニ肺結核患者ノ心筋炎ニ Bochner ハ葡萄糖液靜脈注射ヲ有效トセリ、即チ三〇乃至五〇%液毎日四乃至五回三〇乃至一〇〇劑ヲ用ヒ、血糖過多ヲ起セバ「インシュリン」ノ皮下注射ト併用ス。

Angiolympe ニ就キテモ嘗テ書キタルガ Hartinger ハ其反應ノ強キノ故ヲ以テ外來患者ニ使用セヌ様ニ警告セリ、又 Roman ハ豫防的及ビ治療的動物試驗ニテ接種動物ノ抵抗力ノ多少増進スルヲ見タリ。

慢性結核ニテ慢性微毒ヲ合併セル場合ニハ Trepanol ノ應用ガ有效ナリシガ沌水ノ結核ニハ推奨出來ズ。

Weninger 氏吸入藥ハ今ヤ全ク山師藥ノ假面ヲ剝ガレタリ。Czaplewski ハ混合傳染ノ意義ニ對スル Koch ノ舊見解ニ基キ其治療ニ向ツテ種々ノ吸入藥ヲ推奨セリ(例ヘバ、加里石鹼精五〇・一〇%薄荷腦酒精液一〇、「フォルマリン」〇・五乃至一・〇、「テレピン」油一〇)、氏ハ尙ホ「クロール」酸「カリウム」錠(〇・二五)ヲ一〇〇劑入りノ滴瓶ニ入レ、之ニ局法鹽酸一〇劑ヲ注加シ其一乃至五滴ヲ半立乃至一立ノ熱湯ニ滴下シ、斯クテ發生スル鹽素蒸氣ヲ吸入セシム、其他ル「ゴール」氏液(一・三・一〇〇)一乃至五滴ヲ「コップ」一杯ノ水ニ滴下シテ一頓ニ服用セシム、後者ハ上氣道「カタル」殊ニ流患ノ際ニ稱揚セラル。

喀痰ヨリ分離培養セル混合傳染菌ニテ作レルモノヲ皮下注射用ニ供スルコトハ今尙ホ屢々試ミラル、コト余等既ニ前報告ニテ屢々述ベシガ Ilberg 及 Cantani ハ斯ノ如キ混合「ワクチン」ヲ作りテ用ヒシモ極外ノ效ヲ擧ゲ得ザリキ。

### 三 化學的療法

結核ノ化學的療法ニ關シテハ今尙ホ金療法ガ興味ノ中心ヲナス、之ニ對スル余等ノ立場ハ嘗テ述ベシ所ナルガ、其ノ後

ノ研究ニヨリテ變ズル所ナシ。即チ余等ハ金療法モ亦一種ノ刺戟療法ト見做ス、金ハ結核組織ニ作用シ、恐ラク網狀織上皮細胞系統ニ作用スルナラントノ Guth 氏ノ觀點ハ確カニ注目ニ値ス。金ノ滯溜及ビ排泄ニ關シテハ吾人未ダ精確ノ智識ヲ有セズ一部ハ確カニ腸管ヨリ大部分ハ尿中ニ排出セラル、炎衝組織ニハ癥痕組織ニ於ケルヨリモ強ク殘留スルコト可能ナリ。

此報告年次中最モ盛ニ研究セラレシハ Møllgaard ノ Sanoerysin ナルガ其治效ニ就キテハ諸説紛々タリ、(譯者曰、Sanoerysin ニ關スル諸家ノ報告ハ「結核」第八號ミヨルゴー氏結核治療法調査員會報告ニ詳述セラレアルヲ以テ茲ニハ省略ス) 然レドモ一言以テ之ヲ掩ヘバ本報告年次中ニハ「サノクリシン」問題ノ解決ヲ見ルニ至ラズト雖モ、此金療法ヲ以テ眞個ノ結核化學的療法トナシ難キコト愈々明瞭トナリタリ。

「サノクリシン」以外ノ金製劑例ヘハ Krysolgan, Triphal, Auroplos 等ニ就キテハ實驗未ダ豊富ナラズ、Wiele、Triphalヲ結核ニ用フルコトヲ戒メタルモ氏等ノ用量ハ〇・〇一乃至〇・〇二ニシテ大量ニ過ギシ感アリ。Schwarz、ハ乾癬ニ之ヲ〇・〇一乃至〇・一用ヒテ多少ノ效果アリト云ヒ、Zwerg, FINDER 等ハ肺及ビ上氣道結核ニ效果ヲ見タリ。

Ritter 及ビ Pohl ハ銅劑ニテ治療セル患者ニ永續的效果ヲ證明セリト云フ、即チ二三二例中一一%ハ健康勤勞可能トナリ、二七%ハ再發シテ更ニ治療ヲ要シ、一六%ハ勤勞不可能四六%ハ死亡セリ、而シ此成績ニテハ原著者ノ言フ如ク有效ヲ立證セルモノトハ思ハレズ。Reyハ硫酸銅ノ一〇%水溶液ヲ結核性瘻孔ニ注射シテ治效ヲ收メタリ、即チ二乃至三劑、幾回カ注射セルナリ。

Walburn ハ金屬鹽類ノ多數ヲ動物ノ實驗的結核ニ試ミタルニ最モ有效ナルハ Ba. Al. I. n. Ce. Se. Cd. Mo. Ru. 等ニシテ W. O. Pe. Fr. 等ハ之ニ劣レリ。沃度ハ今尙ホ殊ニ佛國ニテ結核ノ内服ニ用ヒラレ效アリト云フ、就中沃度丁幾ガ賞用セラル、而シ Mariette, Burke 等ノ試驗ニヨルト此療法ハ無效ナルノミナラズ有害ナリト云フ、余等ノ見解モ亦然リ、Tonetハ生殖器結核ニ二乃至五日ノ間隔ニテ膠質沃度ノ筋肉注射ヲ行フトキハ獨リ一般狀態ノ輕快ノミナラズ局部病機ニモ亦好影響アリト報告セリ。

#### 四 榮養ト滋養劑

Sauerbruch, Hermannsdorfer, Gerson 等ハ特殊ノ獻立ヲ研究セリ、ソハ氏等ガ有益ナリト考フル Azidose ヲ保チ延ビテハ體內ノ礦物質組成ニ影響セシメントノ考案ニシテ蛋白ト「ヴィタミン」ト脂肪ニ富ミ食鹽ハ殆んど全ク除キアリ。其特長ハ食鹽ノ脱却ト同時ニ身體ヲ他ノ礦物質ニテ横溢セシムルニアリ、肺其他ノ結核ノ各型ニ非常ナル輕快ヲ見タリト云フ、此法ニテハ患者ハ著シク榮養過剩トナル、「アチドローゼ」ガ眞ニ有效ナリヤ否ヤハ尙ホ頗ル議論アル所ニシテ Andersen ニヨルニ Gerson 氏食餌ハ殊ニ「アルカリ」ニ富メリト云フ、Andersen ハ酸性食餌ハ炎衝ヲ増ス、身體ニハ「カルチウム」ヲ蓄積セシメザルベカラズ、夫ニハ「アルカリ」性食餌ヲ與フルガ最良ナリト云フ、而シテ氏ハ燕麥ガ硅酸ニ富ムノ故ニ特ニ推賞セリ。

鹽素ノ攝取ハ制限ヲ要ス。Ragnar-Berg ハ可及的「アルカリ」性食餌ヲ推賞シ Martin ハ礦物質ニ富メル果物、野菜類ヲ豊富ニ與ヘテ血液「アルカリ」度ノ増加ヲ計ルベク、酸性鹽類ノ平衡狀態ハ是非保持セラル、ヲ要スト云ヘリ。最近多數ノ礦物鹽類ガ市場ニ現ハレ且ツ推賞セラル、モ其眞價ハ今尙ホ試験的ノ域ヲ脱セズ。

肝油ハ結核患者ノ榮養上益々主要ノ地位ヲ占ムルコト當然ナリ、Tauscher ハ唯肝油製劑ノミ與フルコトヲ稱揚ス、之ハ「ヴィタミン」ニ富ム、之ニ「カルチウム」ヲ追加スルハ有益ナリ、Maltoselol ハ特ニ賞用ニ値ス。Rubner, Schittenhelm ハAleutina ヲ賞用ス。之ハ酵素及麥芽ヲ含ム、用ヒ善クシテ利用率高ク含窒素量二五%ニシテ「ヴィタミン」ニ富メリ。

停止性結核ニテハ通常血糖量高キモノナルガ斯カル例ニテハ「インシュリン」肥胖療法ガ可ナリ (Hofhauser, Schön 等) 含水炭素ヲ多量ニ與フルトキ一日二回注射ス、一回量五單位ヨリ始メ五〇單位ニ至ル、血糖過少反應ニ注意スベシ、又病竈反應ニモ注意ヲ拂フベシ、活動性結核及ビ咯血傾向ハ禁忌ナリ、又月經時ニハ「インシュリン」ヲ用フベカラズ。

痛風患者ノ結核ハ普通無害良性ナル事實ニ基キ Aurogen ヲ以テ體內ノ尿酸増加ヲ起シ、有效ニ作用セシメントノ企アリ。之ハ蒜ノ如キ臭氣アル肉「エキス」ニシテ一日量三乃至五茶匙ヨリ初メ三食匙ニ至ル Padel ハ之ニヨリテ血球沈降ノ緩徐ト血像ノ改善ヲ認メタリト云フ。

(東京市療養所 遠藤繁清譯)